

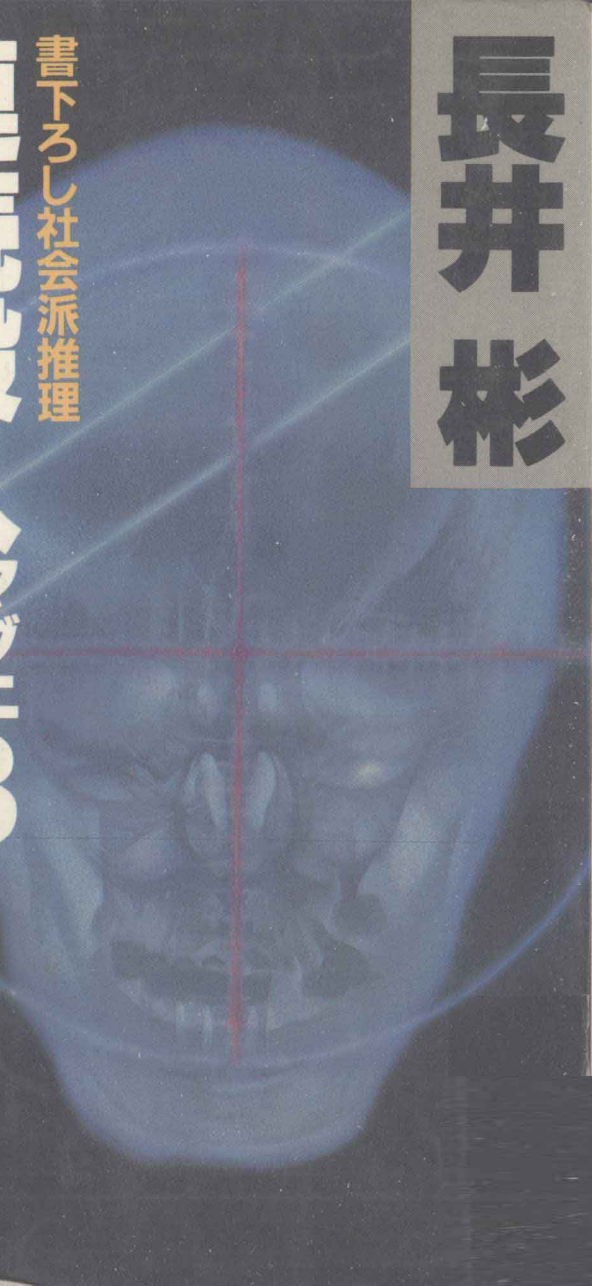
長井彬

書下ろし社会派推理

連続殺人マグニチュード8

KODANSHA NOVELS

講談社
ノベルス



連続殺人マクニード8

昭和五八年一月八日第一刷発行

KODANSHA NOVELS

定価六六〇円

著者—長井 彬 ©1983 AKIRA NAGAI Printed in Japan

発行者—三木 章



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二—二 郵便番号一—二—二 電話東京(〇三)—九四五—二—二 (大代表)
振替東京八一三九三〇

印刷所—株式会社廣済堂 製本所—大口製本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替え致します。

KODANSHA NOVELS

続殺人マクニ
チユード8

开彬

ODANSHA 講談社
ノベルス NOVELS

ブックデザイン 市川英夫
カバーイラストレーション 横山明
本文イラストレーション 横山宏

★昭和二十年八月大本営発表（七日十五時三十分）

一、昨八月六日広島市は敵B 29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり。

二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり。

★昭和二十九年九月「ワシントンUP特電二十三日発」

トルーマン米大統領は二十三日「米国政府は数週間以前にソ連において原子爆発が起ったことの証拠を持っている」と発表した。

★昭和三十三年「国際地球観測年」。

★昭和五十一年七月「ジュネーブAFP二十日発」ジュ

ネーブの国連軍縮委では、核実験禁止の技術的決め手として地震観測の国際的ネットワークを検討することを決定した。

★昭和五十三年一月十四日、伊豆沖地震で死者二十五

人。四月四日「大規模地震対策特別措置法案」を閣議決定、国会審議を経て十二月十四日施行。

★昭和五十四年八月七日、静岡など六県の一七〇市町村

を「地震防災強化地域」に指定。

ざわめきが砂ぼこりのように編集局の広いフロアにたち込めていた。

社会部、地方部、政治部、経済部、外信部、運動部——無秩序に並んだ机のあちこちで、絶えずだれかがしゃべり、だれかが電話していた。だれかがせかせかせか歩き回っていた。いままでの数えきれない夜と同じような九月九日の午後八時十分、中央新聞が最も忙しい時間であつた。

その編集局の中央にある整理部の部長席で、曾我が刷り上がったばかりの十版に目を通していた。顔をしかめた。活気のない紙面だ。目をひくニュースがどのページにもないではないか。しかも気の抜けた編集。

「おい」と曾我は一面デスクの原田に声をかけた。「十二版のトップは何が入った？」

「十版のまま通します」と原田は怒ったように答える。

「ほかにないも無いんですから。仕方ないですよ」

十版のままならば、政治部出稿の行政改革の記事だ。これは作文ではないか、退屈で長いだけの……。

「行革の空念仏なんかだれも読みはせんよ。出稿予定表にあった社会部の地震予知……あれはまだ来ないのか？」

「来ました。来ました。寝言みたいにはつきりしないので、第二社会面に回しました。『慎重に観測データを積み上げる方針』というだけでしてね」

「そうか、モノにならんか、ふむ」と曾我は未練げな声を出して、社会面デスクの幸川の方を振りむいた。

「ナンパはどうなんだ？ ハデにいけるものは？」

「なにも無いですなあ、こつちも」と幸川はあきらめたように言う。「ザコばかり。今夜は生きのよい魚は揚がってきません。しょうがないから省エネ物語を……」

省エネのお話だって？ 一面も社会面も作文で埋める気なのか？

「ニュースらしいものはないのか。ニュースらしいものは」と曾我はマジック・ペンの尻で机をたたいた。「もう一度、社会部をつついて何か出させるんだ」

「だって部長、何もないんだから……。ドカンと東海大地震でも起こってくれませんかね。『あす起こってもおかしくはない』と言いながら、一向に起こらないじゃないですか。マグニチュード8でなくても辛棒しますよ。もう一回り小さいヤツでも……」と幸川は不穏なことを口走る。

それでも、言われたように社会部のデスクへ新原稿の催促に出向いたが、すぐに手ぶらで戻ってきた。

「部長、毎毎新聞の動きがおかしいようです」と緊張した表情である。「社会部が騒ぎ始めています。新宿のホステス殺人はあのままだし、ニセ札の方も割れた様子がない。警視庁関係では抜かれてない、と言っています……。毎毎の夜回りが今夜はいやに数が少くてひっそりし過ぎていますそうです」

それから。うちがザコ種を集めているときに限ってこうだ。

「なんだって？ 警察種でないとすれば、地震予知じゃなからうな、え？ おい。いま特種が出るとすれば、それしかないぞ」

「大丈夫ですよ。ウチも気象庁の地震記事が第二社会面

に入っているし……政治部か経済部関係じゃないですかね？」

「いや違うだろう」と一面デスクの原田が口をはさんで首をかしげた。「今夜はネタ薄だから硬派関係の夜回りは、何でも拾ってくることになっているんだ」

「ま、とにかくトップはいつでも空けられるように組んでおくんだ」

曾我はそう言うのと立ち上がって腕組みをした。

新聞社には、新聞輸送の途中デポ地点で、刷り上がったばかりのお互いの新聞を各社が交換する習慣がある。それを發送部が本社に持ち帰って整理部に届ける。販売店を通してくる三、四時間後の配達を待たずに、ライバル同士が敵の動向をつかんで競争するわけだ。この夜の交換紙は少し遅れて十一時ごろに届いた。

二時間前にくらべて各部の人数は目立って減り、編集局は閉店後のスーパードのようであった。

何が出ている？ と交換紙を待ち構えていた曾我は、ひたたくるように各紙の束を受け取ったが、毎毎新聞を抜き出すと、一目見るなり

「やられた」とうめいた。

『駿河湾中心に異常な地殻変動』と左右いっぱい張ったトッパン文字が威嚇するように曽我の目を射たのである。

『気象庁、臨戦体制へ急ぐ。M8級予知に全器材集中の構え』と見出しは五段抜きであった。前文も五段組みになっている。

「九日午後、気象庁で開かれた地震予知会議（小石武夫会長）第十一回定期協議会の席上、東海大地震の震源域と目されている駿河湾一帯において、最近異常な地殻変動を示すデータが集積しつつあることが報告された。

これらデータの中で注目されたのは、『反転現象』で、『いままでの地殻変動の方向が、逆方向に転じた時は、地震発生が間近い』といわれていることから、予知会議協議会では緊張した議論がたたかわされた。

すなわち①伊豆半島の多くの三角点は達磨山を始めとして、いまだ東北への移動が観測されていたが、最新のデータではこれが、『反転』して南西方向へ動いている兆候が出ている。この結果、例えば達磨山と日本平東麓にある村松との距離三三・八キロなどは、この百年間に一メートル一〇センチ近くも縮み続けていたものが、今

回は逆に六センチも伸びる現象が起こっている。②そのほか、国道一号線沿いの一等水準点も沈下と隆起の跛行的データを示しており③東海沿岸一帯の検潮所の観測結果も見のがし得ない数値を指している。吉良港ではプラス二〇センチ、焼津港でもプラス三二センチ。反対に伊豆半島西岸の戸田ではプラス・マイナス零、清水港ではマイナス一〇センチのデータを得た。④さらに千葉県鋸山地下の地殻変動観測所の水管傾斜計は西南西方向への傾斜が続いていたが、先日からはこれがストップして一日平均五日分くらいの逆方向への傾斜を示し始めている。

一般に地殻のゆがみは、一キロメートルについて一〇センチの伸縮が生じると破壊活動が発生するといわれており、今回のデータは駿河湾奥深く生じている地殻のゆがみが或いはもはや限界に達したのではないかと疑う根拠になっている。

このため気象庁では、全観測器材を東海地域に集中して予知活動を臨戦体制にもってゆくことも検討し始めた模様であり、政府も防災対策の積極化に取り組む構えを示し始めている。

このような前文に続いて、本文ではこれらのデータを

解説的に繰り返し、別項として予知会議のメンバーである水野東工大教授の談話を写真入りで掲載していた。

「心配するな、と言えば気休めになる」と水野教授は積極的な姿勢で語っている。「地殻のゆがみが相当程度に達していることは疑いがなからう。大地震がM（マグニチュード）8クラスになるか、M7クラスにとどまるか、それは分らないが、予知活動に全力をあげるのが我々の務めだ。そのために警報を出すか出さぬかは行政サイドの決めることで、学問、研究は判断の材料をできるだけ豊富に提供する使命を持っている。いずれにせよ、情報というものは市民に惜しみなく伝達してこそ、情報不足の疑心暗鬼からくる無責任なデマを防止できるのであるから……」

「ううむ」と曽我はもう一度うなった。

「東海地域を観測集中地域に格上げすることに決定したのですか？」と社会部の久慈デスクが横合いからのぞき込んで言う。

「そんなことは、ひとつも書いてない。まあ読んでみる」と曽我は久慈に毎毎を渡しながらか言った。「それにしても、これはまたセンサーショナルにやったものだ。

幸川君！」

「は？」

「ウチの地震原稿は第二社会面で出稿したんだな。モニターがもう出ているだろう？ おれが読む」

「ウチの原稿はたいしたことはないと思ったのですがね……」と幸川は言い訳のようなことをつぶやきながらモニターを手渡した。そして曽我の顔を心配そうに見守る。「こんな大事な原稿を第二社会面につっこむとは」と怒鳴られそうな気がしているのである。

モニターを読み終った曽我は、まだ毎毎を読みふけている社会部の久慈デスクを振り返った。

「君、毎毎の記事をどう思う？」

「ウチの地震原稿とはまるっきり違っていますね」と久慈は目を上げて答えた。「毎毎は水野教授から相当のレクチャーを受けているんですね、きつと。どうして今、こんな記事を書いたのだろうか？」

「勘ぐる」と曽我が言った。「予知会議が地震警報の空振りをしたときのことを考えての、予防線かな。『オカミが来た』と二、三度金切声をあげておく必要を感じているのかもしれない。考え過ぎかな。しかし、毎毎

がそれに乗っかるとはな。ウチの記事は氣象庁回りの原稿だろう？ だれだったかな？ え？ 七宮の原稿か」

七宮ならば曾我はよく知っていた。元は整理部にいて、曾我が副部長時代に可愛がった記者である。二年ほど前に社会部に転じた。結婚したという話は聞かないから、まだ独身のはずだがしっかりしている。あの七宮ならば、大事な節目を見落すことはあるまいが、と曾我は思った。

「あ、ちょうどよかった」と久慈デスクが声をあげた。

「七宮が夜回りから帰ってきました。おい！ 七宮君」

呼ばれてやってきた七宮記者に久慈は毎毎新聞をつきつけた。

「見ろよ、毎毎がやってるぞ。どうなっているんだ？」

「え？」

七宮記者の目が毎毎の紙面に吸いつけられた。むさばるように読むうちに顔がしだいに紅潮してきて、何か言おうとした。

「落ち着いて全部読め」と曾我がそれを制した。「毎毎の内容は自分も全部書いておいた、と言いたいのだろう。それは分っている。おれなら局長から命令されたっ

て、こんな紙面は作らんさ。見出しだってよく見てみる。決定的なことは何も言っていないじゃないか。『駿河湾中心に異常な地殻変動』だって？ 百年昔からそうじゃないのか。『臨戦体制へ急ぐ』とは具体的にどうなることなんだい？ 東海・南関東を集中観測地域に格上げすることか、と思って読んでみると何ひとつ決定していないじゃないか。『観測器材を集中の構え』というのが『構え』とは何だね？ 具体的なことは何も書かずにあいまいに逃げている。問題は異常データだが、観測値の意味はおれのようなしろうとは分らん。毎毎の記事と君の原稿の違いは、どこから出てきたのかね？」

「こんな書き方って、ありませんよ」と七宮は口をとんがらせて言った。「まるで今にも東海大地震が襲ってきてそうじゃありませんか。水野教授の主張ばかりに力点を置いたのですよ。しかも予知会議のデータをどこかでリライトして色づけしてしまったのにきまっています。表現が間違っています。ぼくの原稿にも『データの解釈について楽観、悲観の両論が出たが……』と書いておきましたかね。予知会議内部では硬軟対立する議論が随分と激しいらしい。何しろ会のメンバーは六人ですが、大学

や学科が違うのは当然としても、地質学や地磁気、鉱物と専門も違うし、それぞれの学問的立場にも相違があります。地震予知そのものについても、M8クラスならば完全に予知できるはずだという樂觀論者から、いまは不可能だが、可能にする努力をしないとすると悲觀論者までいるのだから。従って觀測データの位置づけも人によって極端に異なる場合が出てくるのです」

「なるほど」と曾我はうなずいた。「その水野教授というのは予知可能論の積極派なのだね」

「そうです」と七宮は続ける。「地震の話は人心に与える影響がやたらと大きいし、しろうとはわけのわからんデータがいっぱい出てくるし、一部のデータを勝手な推測で外部に発表されては大変だということで、会議の席は新聞記者の傍聴禁止、その結論も小石会長が一本にして簡単にしか発表しないのです。だから取材に苦心するわけでした……メンバーはみんな公式的には何も言いませんからね。しかし、データの意味が分らないので記事が書けないという理由をつけて、その質問という形をとっては各社とも、メンバーを個別にアタックしているわけです」

「わかった、事情は」と曾我が言った。「毎毎は平素から水野教授に食いこんでいるわけだな。ところで、水野教授と正反対の立場にある人はだれなんだ？」

「それは」と七宮はちょっとドギマギして言った。「東大地震研の教授の木村郁博士でしょう」

「木村博士ね」と確かめながら曾我が、七宮の動揺にオヤという顔をした。「君はその人と親しいのだな」

「いや、親しいといえば語弊があります」と七宮は言う。「教授は有名な交際嫌いです。研究一本で酒も飲みません。顔に戦争のときの傷が残っていて、本人はそれを気にしているらしいですが、どこの社の記者とも極力接触を避けているのです。ジャーナリズムに売りこみのうまい水野教授とは対照的です。そんな木村教授が予知会議のメンバーに引っぱり出されたのは、教授の奥さんが学界元老の東大名誉教授、田中博士の娘さんだということからだ、という人もいます。いい人なのですがね、まあ変人といってよいでしょうね。しかし何というか……その……ぼくは教授の家族、家族の一人ですね、それに知り合いがありまして、そのう……そういったことから教授の学問的良心がよく理解できるのですが」

「その解説で大体分った」と曾我は七宮に答えておいて久慈の方へ向き直った。「毎毎がこれほどやっているのに、ウチが第二社会面で簡単な予知会議の記事を載せただけでは済むまいな。さて……と、編集局長を呼び出してあるから、もう追っつけ現れるだろう。相談して対策を決めるが、どうせ七宮君の記事をくわしく書き直してもらうことになるだろう。どうだい？　これから補強記事が集められるかな？　最終版まで一時間ほどしかないが……。勿論、毎毎の水野教授に対抗して小石会長と木村教授の話を取ってもらわなければならぬからね。七宮独身記者にはファイトを出してもらおうとして」

「さあ、一時間では……」と久慈デスクは首を振って言った。「七宮君、木村教授をたたき起こすとして、彼はどこに住んでいる？　え？　市川？　江戸川を越えたところだな。車を飛ばして往復だけで半時間は見なければならぬ。ま、とにかく走ってくれ」

七宮記者が小走りに編集局を出ていったあと、かけつけた編集局長、次長、社会部長と整理部長の相談が行われたが、毎毎と同じ日の朝刊で対抗紙面を作るのは、時間的にも不可能であった。それなら一日遅らせてもよ

い、徹底的にくわしく冷静な記事を書き返すこと、これをやる、それ以上の対抗策はないということになった。その夜はのんびり寝るところではなくなった。

一夜が明けて九月十日になった。

毎毎新聞の地震報道は人々の興奮を呼び起こした。折も折であつたのである。一週間ほど前に、ある週刊誌が『東海大地震襲来のXデーは九月十二日か、それとも十二月五日』という、何の科学的根拠もない読物を載せたせいか、正体のはっきりしない不安と動揺が関東・東海に広がりつつあつた。そこへ毎毎の記事が出たわけであつた。冷静にそれを読めば大地震の襲来を告げているわけではなかったが、『やっぱり地震がくる』と受けとつた人が多かった。

中央新聞の方は、ついに最終十四版になつても、当初の簡単な落ちついた記事しか載せなかった。

『九日の予知会議協議会では、注目すべきデータが駿河湾周辺を中心として集積し始めたので、慎重な検討を続けている』

これがその趣旨であつた。しかし人々の求めている情報は『地震がくるのか、来ないのか』『くるとすればい

つなのか』という切迫したものであって、慎重に検討するの、どうかを聞いているのではなかった。だから中央新聞の記事に注目した人は殆どなく、読者の問い合わせや苦情の電話がひっきりなしに掛かってきた。

中央新聞はそれに一日堪えた。そして翌日“Xデー”と称する十二日の前日に、一挙に巻き返しに出た。

一面の半分以上と社会面の右半分をさいて、中央新聞に東海大地震の予知活動が出た。それは名指しで毎新聞を取り上げて真っ向から否定する形こそ取っていなかったが、内容においては毎毎と同じデータを扱いながらいちいち反証を挙げ、全く反対の結論を打ち出していた。

例えば①東南——北西の方向に縮みつつあった駿河湾が達磨山などの観測では逆に伸長したという“現象”に触れながら、伊豆半島のなのお多くの三角点で異常が認められぬ以上、“反転現象”と結論するのは軽卒であるとしていた。②国道一号線沿いの一等水準点沈下と隆起のチグハグなデータは、それぞれ固有の原因によるものらしい。日本坂トンネル補強工事に地下水を急激に汲み上げたため水脈に変動が生じたのではないか。浜岡付近

の水準点も不思議な動きを示しているが、原子力発電所の井水汲み上げ量とパラレルの関係にあると指摘した。

また③各地の検潮データのバラツキも“反転”とみるよりも海水温度、密度、潮流、大気圧などとの関連が正確に算定されない以上、これから地殻の変動値を導き出すことはできない。④鋸山の水管傾斜計が急激な逆傾斜を示しているのは事実であるが、これとても逆傾斜そのものが一時的なものか、“反転現象”の開始を告げるものかは、まだ断定できる時期ではないと書いていた。

そして伊豆大島の爆発実験で観測した地震波のタテ波と横波の伝播スピードの差が拡大していないこと、また地下水のラドン含有量にも変化がないこと、さらに大地震の前震らしいものが頻発していないことなどから、いま急にマグニチュード8クラスの東海大地震が襲来するとは言い難い。——このような意見が地震予知会議の支配的な意見である、と報道していた。

とくに目立ったのは、毎新聞の水野東工大教授に対抗するように、地震研教授・木村郁博士が「軽卒な地震情報の発表は人々を惑わすだけで百害あって一利なし」

ときめつけていることであつた。だれが見ても中央新聞の記事の元になつてゐるのは木村教授で、まるで水野教授にケンカを売つてゐるようであつた。

木村教授は「地殻のゆがみが蓄積されているのは事実であるが、直ちに大地震発生にまで結びつくかどうかは、いまのところまだまだ分らない。正直な話、何も言えない。警戒宣言がどうのこうのとはとんでもない。この段階で価値の定まらぬデータを発表し情報を流すことは、専門知識でも分析不能なことをしようと解釈で代用することになり、無責任なデマをはびこらせるばかりである……」と言つてゐた。

表面に立つことが大嫌いで、新聞に意見を述べることなど、今まで全くしなかつた木村教授である。その人となりを知る人々はこれを読んで驚いた。

実は七宮記者が相当強引に質問をぶつつけ、マスコミ慣れしていない教授の答えをつなぎ合わせたものが談話形式で発表されたらしかつた。その間の事情を曾我整理部長だけは推察してゐた。

* * *

「え？ 東海大地震ですか？ デマですよ。政府は何も発表していませんからね。なぜ発表しなかつて？ もしもし、だからウチの新聞に書いてあるでしょう……」と久慈デスクは、何度目かの読者の電話を切つた。いらしてゐるのは、はた目からでも明らかであつた。「そんなにカリカリしなさんな」と曾我が整理部長席からやってきて声をかけた。

「仕事にもなんにもなりはしない」と久慈は眉にシワを寄せて言う。「地震はほんとに來るのか？ いつ來るのか？ といふ問い合わせばかりです」

ムリもない。外勤記者が出払つたあと、原稿さばきに忙殺されてゐるところへ、朝からひっきりなしに読者の電話なのであつた。

「ウチの地震キャンペーンは失敗だったな。やつた後で気がついた」と曾我が言つた。「人は信じたいものだけしか信じないんだね」

「なんですか？ それは」

クソ忙しい最中に人生論でもあるまいに、という顔を久慈はする。

「いや、読者を説得する力がわれわれの記事にはなかつ

た、ということさ」

「しかしね」と久慈の声がとがる。「あれほどやったんですよ。あれ以上にどう書くんです？」

「毎毎の記事にはね、人々の漠然とした不安に應える魅力があった。ウチの記事はその翌日の時点で出たがどうだった。不安の中で何もしないでいることをすすめただけだ。それでは人は納得してくれない」

「読者はね、中央新聞は政府当局の意向を受けて、正しい地震情報を隠しているのだろう、と疑っています。電話でそう言ってきます」

「そう言うかもしれないな」

「毎毎も、地震がすぐ来るとは書いていないのに、いつの間にか尾ヒレがついて、断片的に人の口から口へ飛び回っているようです。うわさは相当なものですよ。週刊誌が書いたとか毎毎が報道したとか、そういった出所や内容はもうあやふやになってしまっているようです」

「デマは我々の想像以上に広がっているのだな。みんなは『地震はいつくるのか？』という一点を知りたがっているのだ。その場合の答えは『いまはこないだろうが、分らない』が正しくても、表現はそのままではいけ

なかった。断定的に言うべきだった。『きょう地震は絶対に来ない』とね」

「はつきり安全宣言を出すように、気象庁をつつかせているのですか……」

「気象庁も予知会議も何か言えるはずがない。理論的には安全も不安全も言えないし、そうかといって、及び腰でいま何か言えば、デマを知らなかった人まで『なんだ、なんだ、どうしたんだ？』と騒ぎ出すにきまっている。寝た子を起こして回ると同じさ。それより地震警報の空振りの予行演習とみた方が役立つのかもしれない。デマが広がっても、目にみえた人畜の被害は生じないだろうからね」

「そうですか。ウチは正しく報道しているのに……」と久慈はまだ不満そうにつぶやいた。

「うむ」と曽我は怒ったような表情になったが、自分の席に放送部長が上がつてきているのを認めると

「ま、夕刊が終ってからゆっくり君と……」と言い捨てて席に戻った。

放送部長が相談にきた用事も、地震のデマに起因するものであった。